

## 付篇3 海会寺の古代軒瓦と中央政権

森 郁 夫

### 1 はじめに

和泉の地は畿内に属してはいるものの、寺院の造営に関して言えば、他の畿内の諸地域よりかなり遅れていたことが出土瓦から明かである。大和、山背、摂津、河内などの諸地域では6世紀末から7世紀初頭にかけて、寺院の造営が開始されている。ところが和泉においては、現在までに知られる資料を見る限り、7世紀半ば以降になってようやく寺造りが始められたものと思われるのである。この7世紀半ばと言う時期は、全国的に寺院造営事業が盛んになったときである。これは和泉の地が、もともと河内に属しており、その中心地域でなかったことによるのであろう。

和泉全般を見渡してみると、それぞれの寺院で用いられた瓦当文様は多様である。しかも、当該寺院特有の文様を持つものもある。しかし海会寺においては、出土した4種類の軒丸瓦すべてが大和に直結した瓦当文様なのである。海会寺のこれらの瓦当文様が偶然大和のものと似ていたということではあるまい。7世紀前半代の畿内、山背・摂津・河内において営まれた寺の中には、既に大和との間に同范関係が認められるものさえある。そうした関係が生じたのは、それらの寺々の造営者が大和の政権との間に密接な関係を有していたことを示しているのである。したがって、海会寺についても、当然のことながら大和の政権との間に密接な関係があったに相違ないのである。このことは、とりもなおさず造営者の大和政権に対する立場を示すものでもある。検出された遺構との関連に留意しながら、軒丸瓦を中心に海会寺の造営事情を検討しよう。

### 2 海会寺の軒丸瓦

海会寺の軒瓦にはいくつかの特徴があるが、軒平瓦を伴わないことはその最も大きな特徴ということができよう。もっとも、軒平瓦が伴わないと言うものの重弧文軒平瓦が僅か1点だけ出土している。しかし海会寺からは、古代の軒丸瓦が759点出土しているので、軒平瓦の出土数は皆無に等しいと言えよう。

7世紀後半の寺院でありながら、軒先を飾る瓦に軒平瓦が用いられていないということになると、軒丸瓦の瓦当文様がきわめて稚拙であるかのように思われがちであるが、実際には、整った蓮華文を瓦当面に飾っている。すなわちそれらは、別項で報告されているように山

田寺式軒丸瓦2種(I A型式・I B型式)と川原寺式軒丸瓦2種(II A型式・II B型式)である。これら2型式の軒丸瓦はそれぞれ山田寺と川原寺の軒丸瓦に酷似している。I A型式軒丸瓦(以下、「軒丸瓦」を省く)はむしろ四天王寺のものとの同範の可能性が認められている。そして、この軒丸瓦については中房の蓮子が、四天王寺の方が小さく海会寺の方が大きいので、四天王寺のI A型式が先行するものと考えられている。さらにこのI A型式は、大和の吉備寺<sup>①</sup>と木之本廃寺<sup>②</sup>とも同範関係にあるとの見解が示されている。木之本廃寺では、法隆寺若草伽藍のスタンプ文軒平瓦とI A型式が組み合うとのことである。スタンプ文軒平瓦の年代を尊重するかぎり、木之本廃寺でのI A型式は7世紀前半に位置付けられよう。ここに、大和から摂津へ、そして和泉へという、I A型式瓦当範の移動のあったことが知られるのである。<sup>③</sup>

ところで、海会寺では4種の軒丸瓦のうちどれが年代的に最も先行するのでしょうか。海会寺の創建年代を検討する手がかりとしよう。海会寺の発掘調査で出土した軒丸瓦の総点数は759点である。型式不明のものを除いたそれぞれの出土点数は次のとおりである。I A型式107、I B型式399、II A型式164、II B型式1点という数である。各型式の軒丸瓦ともに中央地区(金堂・塔・回廊・講堂地区)から最も多く出土しているのであるが、それぞれの型式がどの遺構と直接結び付くかということになると、それを示す資料はさほど多くない。しかし、最多出土点数をほこるI B型式は堂宇との関係を示唆しそうである。すなわち、I B型式は塔基壇周辺からの出土量が顕著なのである。そのうち、塔基壇東側については金堂基壇西側にあたるわけでもあり、両者の瓦が混在しているのでこの部分については除外しなければならないが、総体的にみてI B型式は塔所用瓦と考えることが出来る。とくに焼亡時、倒壊した塔の部材(相輪・風鐸)と共に検出された一群の瓦は、塔の屋根に葺き上げられていたものであることが確実であり、それらの中にI B型式9点、II A型式5点が含まれていた。

ここで注目すべきことは、II A型式が、塔倒壊時に屋根から落下したままの状況で検出された瓦群の中に含まれていることである。塔基壇周辺を見渡すと、I B型式より数量的に劣るとは言うものの、II A型式の出土が目だつのである。II A型式がI B型式と共に塔に用いられたものである可能性が十分に認められる。このことが強調できるのは瓦当直径である。両者の平均値は、I B型式17.2cm、II A型式17.9cmであり、ほとんど変わらない。それに対してI A型式の瓦当直径は19.8cmである。屋根に葺き上げる場合、文様構成よりも寸法の規格性の方がより重要視されるのである。

瓦当直径が一回り大きいI A型式の分布状況を見ると、遺構に関連するところとしては塔・金堂間についてはさきにも述べたように両者のものが混在しているのであるが、金堂

北側の瓦溜りからはⅠA型式だけが出土している。このことはⅠA型式が金堂に用いられたものであることを十分に示すものといえよう。

さて、このように金堂ではⅠA型式が、塔ではⅠB・ⅡA型式が用いられたことが明らかになったが、それではそれぞれの年代をどの様に考えたら良いのだろうか。それぞれの瓦当文様が中央寺院所用のものと酷似していることからすれば、それらの寺の年代を援用できるはずである。ところが、山田寺については近年の発掘調査の結果、数十年にわたって同一文様6型式の軒丸瓦が生産されたことが明らかになっているので、山田寺の年代をそのままあてはめることができにくい。したがって、単純に山田寺から川原寺式へというわけにはいかない面がある。ただ、海会寺所用の2種の山田寺式軒丸瓦は、その文様構成からⅠA型式からⅠB型式へ変化したことが明かである。また、一般に古代寺院の造営に際しては金堂が最初に営まれ、次に塔の造営が行われる傾向にあるので、海会寺についても金堂が塔以下の諸堂宇に先行して建立されたというように考えて良からう。ということになれば、金堂所用山田寺式軒丸瓦(ⅠA型式)が先行し、塔所用山田寺式軒丸瓦と川原寺式軒丸瓦(ⅠB・ⅡA型式)が後出のものとすることができる。

山田寺の創建年代は舒明13年(641)である。山田寺創建以前に山田寺式軒丸瓦が存在したかどうか、厳密に言えば分からないと言わざるを得ないのであるが、一般に広い分布を見せる瓦当文様は、政権の中枢部においてその基本となるものが生み出される場合が多いことからすれば、山田寺をもってその初現とするという従来からの考え方に従ってもよからう。海会寺ⅠA型式は、山田寺のものともくらべても遜色ないものであるが、吉備寺、木之本廃寺、四天王寺を経て瓦当範がもたらされたという点を考慮すると、この軒丸瓦を7世紀半ば以降に置かざるを得ない。

山田寺の伽藍配置は、塔・金堂を南北に配置するいわゆる四天王寺式であり、7世紀前半に多く見受けられるものである。それに対して海会寺の伽藍配置は、金堂と塔が東西に配置されるいわゆる法隆寺式である。法隆寺式伽藍配置という名称で知られるこの配置は、西院法隆寺を初源とするものではない。法隆寺の再建年代についても諸説あるところだが、少なくとも前身法隆寺、すなわち若草伽藍が焼亡した天智9年(670)を遡ることはあり得ない。法隆寺の再建時においては、北面回廊は塔・金堂の背面で閉じていた。再建法隆寺以後に営まれた寺々の中には、法隆寺式伽藍配置とは言うものの、北面回廊が講堂の東西両脇にとりつくものもある。こうした形態は、すでに回廊に対する意識が変化してしまったことを示しているのである。そうした観点から見れば、法隆寺西院における、当初の伽藍配置は本来の形ではある。しかし、同じ斑鳩に造営された法輪寺は、法隆寺西院と同じ伽藍配置であるが、創建時所用軒丸瓦は7世紀半ばに属するものである。すなわち、法隆寺

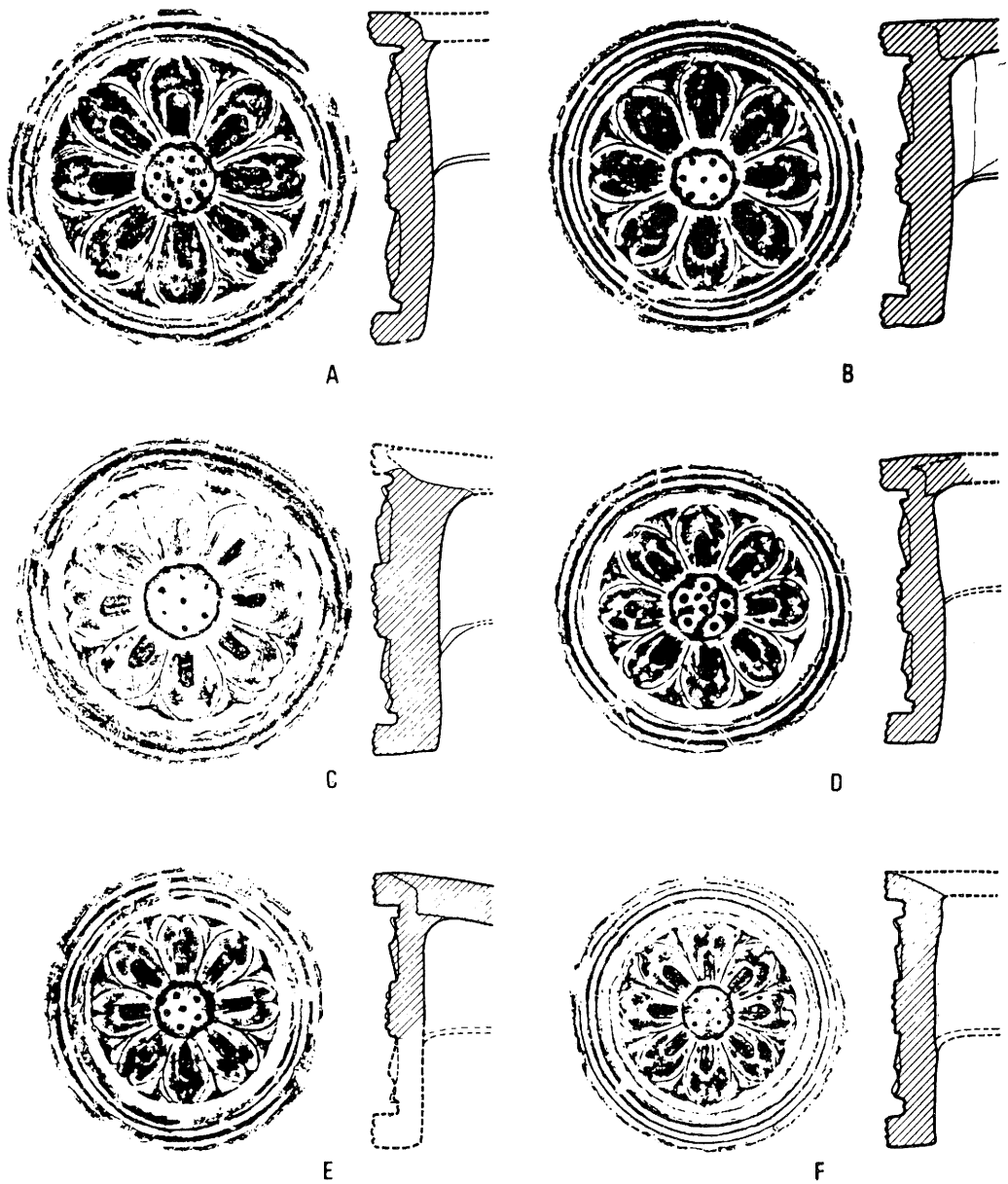
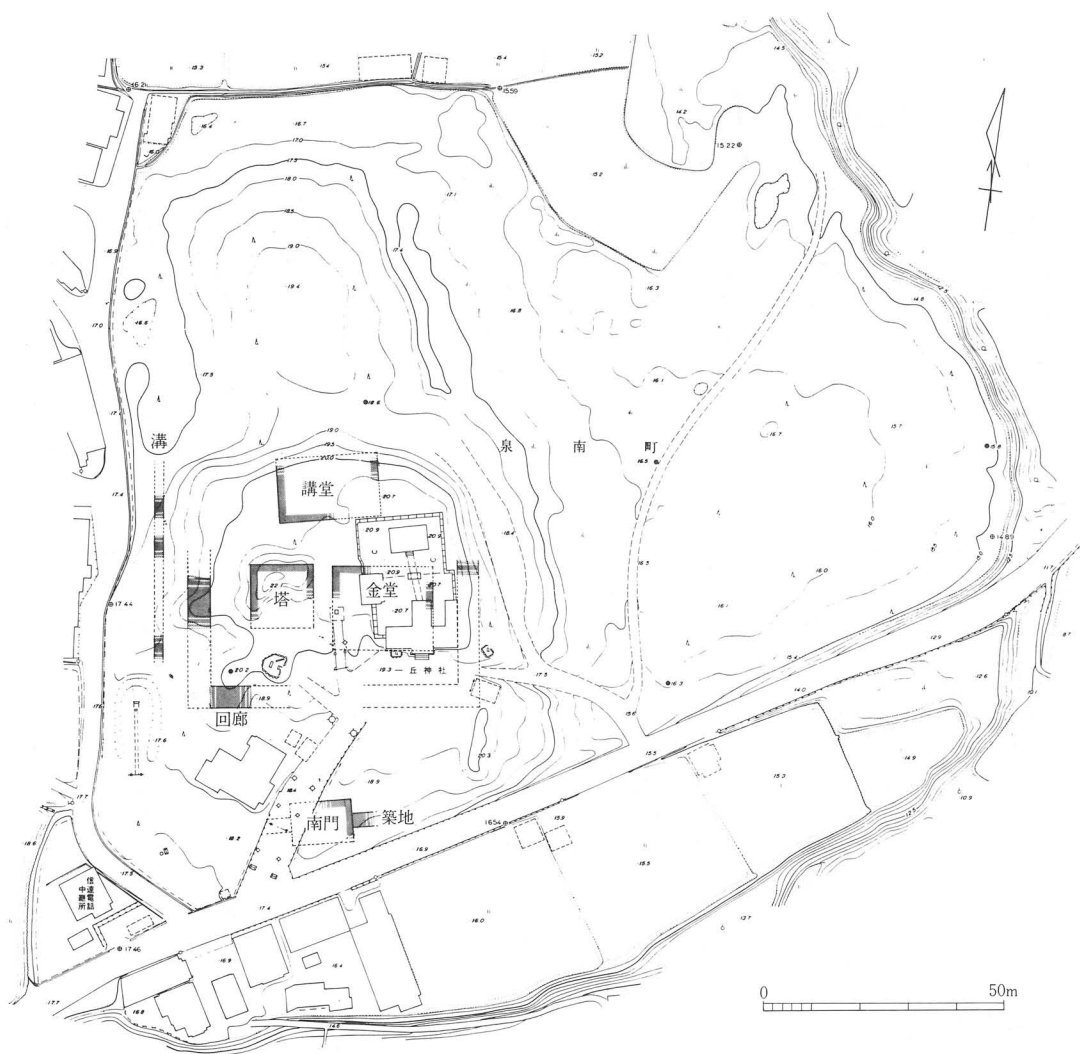


図7 奈良県山田寺の軒丸瓦

式伽藍配置のうち、北面回廊が塔・金堂の背面で閉じるものは、650年頃から少なくとも670年代まで採用されたものである。

ところで、海会寺の伽藍配置についてはどのように考えたら良いだろうか。海会寺の伽藍配置は法隆寺式ではあるが、北面回廊が不明確である。しかし、塔・金堂と講堂との間



### 3 大和系2型式の軒丸瓦をもつ海会寺

山田寺式と川原寺式の2型式の軒丸瓦しかもたない海会寺はどのような性格の寺だったのだろうか。興味あることは、この寺の軒丸瓦ⅠA型式が四天王寺を經由しているにせよ、確実に大和、しかも政権の中枢部である飛鳥地域で用いられた瓦当文様によって作られているということである。四天王寺と大和との関係について言えば、創建時の単弁8弁軒丸瓦が法隆寺若草伽藍との間に同文関係にあること、そしてこの寺が聖徳太子の発願になることである。このことからすれば、海会寺と四天王寺との関係については十分に注意しなければならないのである。

7世紀代の大和の寺と同文関係、あるいは同系統の軒瓦をもつ山背・摂津・河内等の寺を概観してみると、単なる文化的なつながりだけではとらえられない面がある。たとえば別稿で述べたように、山背国内に営まれた寺々の瓦当文様にはそのことが如実に表れている。すなわち、山背国において7世紀初頭に営まれた寺は、葛野郡の北野廃寺であり、相楽郡の高麗寺もその可能性がきわめて高い。北野廃寺の軒瓦には豊浦寺との関連が認められ、高麗寺の軒瓦には飛鳥寺との関連が認められている。このことは、北野廃寺造営者、高麗寺造営者が共に中央政権の実力者である蘇我氏と強いつながりをもっていたことを示している。7世紀半ば過ぎには多くの寺々の造営が行われるのであるが、そうした中に川原寺式と紀寺式という、2型式の大和直結の軒瓦を持つ寺が18カ寺含まれている。そして、川原寺式軒瓦は相楽郡と久世郡に集中的にみられ、紀寺式軒瓦は宇治郡・紀伊郡・愛宕郡の3郡にみられるというように、明確に二つの群に分かれて存在しているのである。このような状況は、川原寺が官の寺であり、紀寺跡もその可能性が高いことの反映と見られるのである。<sup>④</sup>

以上のような同一系統の瓦当文様の分布は、各々の寺の造営者の好みによってその瓦当文様が採用されたとか、偶然の結果同一郡内に同一系統の文様が集中したということを示すものではなかろう。寺院造営という大事業の背後には、必ずや為政者の何等かの働きかけ、いわば何等かの干渉があったに相違なく、その一端が瓦当文様にあらわれているのである。ただ、すべての寺に対して為政者からの干渉があったということではない。しかるべき特定寺院に対して何等かの干渉が行われたと考えられるのである。

大和と山背との間にそのような関係が認められる以上、他の畿内諸国においても同様な関係が存在したと考えるべきであろう。和泉国内における古代寺院跡は、18カ所があげられている。それらのうち16カ所の遺跡から7世紀後半の瓦が出土している。それらのすべてについて実体が明らかにされているわけではなく、寺跡以外のものも含まれている可能性もある。しかし、それらの分布状況を概観すると、摂津・河内から和泉を経て紀伊に至る陸路沿いの要所に寺院が配置されているようにうかがえる。摂津から和泉へ入ったすぐの大鳥

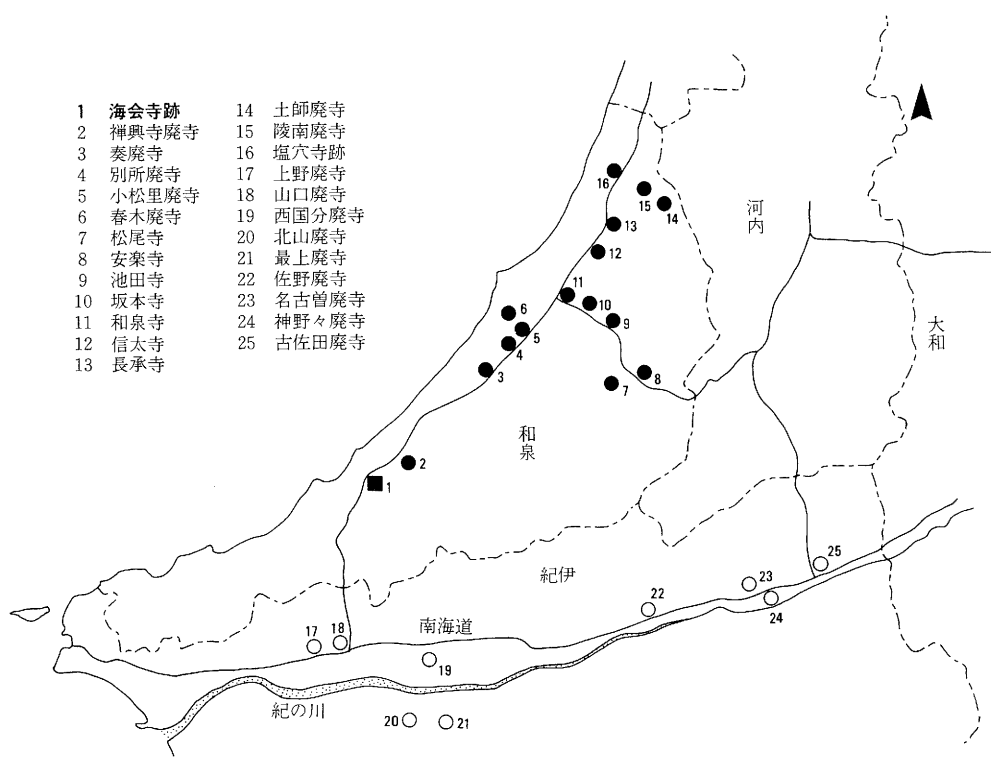


図9 和泉及び紀伊北部の古代寺院分布概念図

郡塩穴郷には塩穴寺跡があり、和泉から河内へ向かう道路との交点に近い和泉郡上泉郷には和泉寺跡が、坂本郷には坂本寺跡があり、この道路を河内に向かって進むと、池田郷には池田寺跡と安樂寺跡がある。安樂寺は後に和泉国分寺となる。再び上泉郷から南へ進むと、日根郡呼啖郷に海会寺がある。以上あげた寺々の名は、それらの寺の実体が必ずしも明らかになっていないとは言うものの、従来から白鳳時代の寺としてその名がよく知られている寺跡である。しかしながらそれらの寺院は、大和系の軒瓦を確かに持っているものの、和泉独自の要素、あるいは畿内における他の要素をもつ軒瓦を合わせ持っているのである。そこに海会寺の独自性がうかがえるのである。海会寺が営まれた呼啖郷から路を南にとると、雄山峠を越えてすぐに紀伊国に入ることができ、南海道に連なる。この南海道との交点近くには西国分廢寺、上野廢寺、山口廢寺という紀伊国を代表する白鳳時代の寺院跡が集中的に見られる。

さて、海会寺出土の軒丸瓦が大和のものと直結していることは、すでに何度もふれてきたところであるが、海会寺の営まれた位置に注目しなければならない。海会寺は、いわば畿内西南端の寺とすることができる。その西南端に営まれた寺院の軒丸瓦が大和直結のも

のであるということは、少なくとも寺院造営に際して、大和の政権と何等かの関係、例えば造営技術の援助があったと考えることができる。要するに、造瓦の面にのみ大和との関係があったとは考えにくいのである。むしろ、多方面にわたった技術援助の結果が、たまたま腐蝕せずに後世に残った瓦に表れていると考えるべきであろう。そのような技術を受け入れることができた背景には、すでにこの寺の造営者が中央の政権保持者と密接な関係を持っていたというようにも考えられる。その造営者が中央政権に対してどのような立場であったのか全く分からないのであるが、中央政権がこの地域を重視していたことは確かなことである。すなわち、7世紀後半、紀の川の川口から畿内へ入る重要なルートが3つあったと考えられるのだが、その中のひとつが紀の川沿いを少し遡って、雄山峠を越えて和泉の地へ入るルートである。このルートをとって和泉に入って程なく、和泉を縦断する幹道に沿った位置に大和直結の軒丸瓦をもつ海会寺が営まれているのである。他のルートを見てみると、紀の川に沿ってそのまま東上すれば大和へ入ることができるのであるが、7世紀後半、この地域が重視されていたことは、大和直結の軒丸瓦をもつ寺々が営まれていることから明らかなのである。それらの寺々は西国分廃寺、佐野廃寺、名古曾廃寺、神野々廃寺、古佐田廃寺などであり、これらの寺々に見られる大和直結の瓦当文様とは薬師寺(本薬師寺)所用のものなのである。すなわち官の大寺との関係が明瞭に現れているのである。7世紀後半、大和の政権がいかにこのルートを重要視していたかがわかる。また、紀伊国伊都郡におかれた古佐田廃寺の西から、北へ道をとると、紀見峠を越えて河内に入ることができる。

古代においては、畿内と畿外とは明瞭に区別されていた。したがって、紀伊から和泉へ入る地域に対しては、常に高い関心が払われていたにちがいない。そして畿内南辺西半部に接する紀伊国北辺部、すなわち紀の川流域に対しても、高い関心がはられていたことが上記の寺々の瓦当文様に現れているのである。

#### 4 まとめ

和泉の地域全域を瓦当文様を主体として見渡したところ、大和直結の軒丸瓦をもつ海会寺は他と比べて特異な立場にあったことが明らかになった。これは、山田寺式と川原寺式の2型式の軒瓦をもってのみこの寺が営まれたことの意味合いからの言である。要は、瓦当文様の同一性と近似性というものが、単に意匠に対する関心度のみによって生ずるものではなく、その背景にはきわめて政治性の強い要素が存在するという意味合いなのである。

海会寺の位置はまさに交通の要衝にあたるのであり、その意味においてこの寺が重要な立場にあったと言えるのである。陸路、水路を問わず、交通路の要衝に中央政権の意志を反映した寺が営まれることは、古代では常に行われていたのである。7世紀後半代、まだ



河内に含まれていた小郡である日根郡に、大和との関係がより強く現れている背景にはおそらく、重要な港を擁していた紀氏との関係が考慮されたものと考えられる。もちろん、こうしたこと以外にもこの地域と大和との直接間接のつながりがあっただろう。例えば、天平19年にまとめられた「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」には、日根郡鳥取郷に法隆寺所有の山林、岳嶋があり、日根郡に庄倉1処ありと記されている。今のところ日根郡内から法隆寺系の軒瓦は出土していないが、このようなところにも大和とのつながりが存在するのである。

いずれにせよ、I A形式が四天王寺所用軒丸瓦と同范品であることは、海会寺の立場が畿内寺院の中でどのような立場であったかをよく表していると言えるのである。四天王寺は古代において、官寺と同等の立場にあった。四天王寺の創建年代については明言しがたい面があるのだが、7世紀初頭に近い頃であることは確かである。ただ、創建時に何等かの事情があったようで、短時期に造営工事が進められたものではなかった。寺観が整えられたのは、海会寺I A形式同范品が用いられた頃のようにあり、この軒丸瓦は「金堂跡をはじめ諸堂跡に普遍していて、一時期を画したものである」と報告されている。ここに言われる画期は、いわゆる大化改新を経た時期であり、650年代を示している。この頃、四天王寺造営に対して官が積極的に関わったのであろう。このような立場にあった、四天王寺の瓦当范を用いて海会寺の軒丸瓦が作られたことは、海会寺の位置が当時であって官によって、かなり重要視されていたことを示しているのである。

以上のような観点から海会寺の軒瓦を眺めてみると、さらに海会寺の立場、むしろ海会寺造営者の立場について多方面からの検討が、今後さらに必要になる。

註 ① 藤沢一夫「遺物」(文化財保護委員会『四天王寺』1967) なお、吉備寺跡と考えられていた遺跡については、瓦窯跡と確認されたようである。註②参照。

② 「左京六条三坊の調査(第45・46次)」(奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16』1986)

③ 大脇潔氏の御教示による。

④ 森郁夫「古代山背の寺院造営」(京都国立博物館『学叢 8』1986)